

北陸自動車道関連遺跡

発掘調査報告書

IV

1978. 3

滋賀県教育委員会

財団
法人

滋賀県文化財保護協会

北陸自動車道関連遺跡
発掘調査報告書

IV

1978.3

滋賀県教育委員会

財団 法人 滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では、北陸自動車道の建設に先き立って、遺跡の発掘調査を昭和48年度より実施しているが、今年度までに、12遺跡の調査を完了した。これらの結果については、その一部をすでに報告したところがありますが、このたび、昭和52年度に実施した余呉町中之郷鉛練古墳の発掘調査の結果を報告するはこびになりました。

鉛練古墳は、墓地移転の際の土取り工事によって不時発見されたものですが、古墳時代後期に至って爆発的にその数を増す後期群集墳の先駆的なものとして位置づけられ、貴重な一資料を提示することになったものであります。当古墳の発見は、地元の篤志家の届出によるものであります、このように、埋蔵文化財の場合、各人の文化財に対する正しい認識によって、歴史に新たな一ページを書き加えることができる所以あり、本報告書がここに上梓されたことで、その認識の一助となれば、最も幸せとするところであります。

最後に、発掘調査および整理業務等に日夜努力いただいた調査員の方々ならびに地元関係者の方々に感謝いたします。

昭和53年3月

滋賀県教育委員会

教育長 中山 正

例　　言

1. 本書は、昭和52年度において、滋賀県教育委員会の指導のもとに、財団法人滋賀県文化財保護協会（理事長 和田純一）が日本道路公團大阪建設局からの委託を受けて実施した北陸自動車道関連遺跡余呉町鉛練古墳発掘調査の報告である。
2. 本調査は、滋賀県教育委員会文化部事務局文化財保護課技師田中勝弘が指導した。
3. 本書報文は田中が執筆した。なお、出土上器観察表および土器実測図については林純の作成になる。
4. 調査および整理業務参加者は次のとおりである。

滋賀県教育委員会　技師　田中勝弘

財團法人 滋賀県文化財保護協会

技師　鬼柳 彰

調査員　林　純

補助員　阪口勝彦、川上真成、藤村善嗣、飯野清志、芳村高史、
岡井　誠、菅井彰夫、南部　基、鈴木　泰、三宅憲明、
原田雅裕、丸岡一成、山岡一郎、宮崎雅美、赤坂博之、
藤田和也、北川頼弘、小牧正明、鈴木俊則、曾根秀夫、
宮南　称、石本好典、加藤榮司

なお、本調査にあたっては、鉛練比古神社宮司岡山要、日本道路公團大阪建設局管理課勝見、同長浜工事事務所庶務課長益田積三、および、余呉町教育委員会他、多くの方々のご助力とご教示を得ることができた。ここに記して謝意を表わします。

目 次

序

はじめに	1
1. 位置と環境	2
イ. 位置と地理的環境	2
ロ. 歴史的環境	2
2. 遺構	6
イ. 墳丘	6
ロ. 主体部	6
3. 遺物	10
イ. 出土状況	10
ロ. 須恵器	12
ハ. 鉄製品	12
4. 考察	13
イ. 鉛練古墳の構造と年代	13
ロ. 湖北地方における古式須恵器	14
ハ. 湖北地方における群集墳発生及びその形成の諸段階	18
おわりに	24

挿 図 目 次

図 1 鉛練古墳位置図	3
図 2 鉛練古墳附近地形図	7
図 3 鉛練古墳遺構実測図	8
図 4 鉛練古墳 a - b 土層断面実測図	9
図 5 鉛練古墳主体部実測図	9
図 6 鉛練古墳出土遺物実測図	10
図 7 湖北地方出土古式須恵器実測図	14

図 版 目 次

図版一 (上)遺跡全景 (北より)	
(下)A・Bトレンチ全景 (西より)	
図版二 (上)主体部全景 (南西より)	
(下)墓塚断面土層	
図版三 (上)主体部近景 (北東より)	
(下)遺物出土状態	
図版四 鉛練古墳出土遺物	

はじめに

当遺跡は、北陸自動車道建設工事に関する墓地移転工事の折、その土取りのための掘穿の際に発見されたものである。頭初、地元鉛練比古神社宮司岡山要氏により、掘穿土中より多量の須恵器が採集され、余呉町教育委員会に届出されたのである。町教育委員会より県文化財保護課に連絡があり、現地調査を実施したのであるが、工事以前に、すでに、古墳を思わせるマウンドの痕跡は認められず、古墳以外の遺跡かと思われたのであるが、土取りのための1m四方程の掘穿塹の埴壁画に凹字形の黒褐色土の入った溝状のものが観察され、この溝内に須恵器の包含されていることが確認された。また、塹辺に散乱する須恵器片やすでに採集されたものも、すべてこの掘穿塹からの出土と判断された。このことから、窯跡あるいは古墳の墓塚かと考えたが、周辺観察によつても、焼土等の散乱は認められず、須恵器類にも窯変が認められないことから、木棺を直葬した小墳である可能性が強いと考えるに至つたのである。

当遺跡は移転墓地の上取り場であるが、その位置が北陸自動車道の路線内にかかり、その建設工事の工程との調整が必要となった。すでに、北陸自動車道関連遺跡である余呉町桜内遺跡、同町黒田永山古墳群の発掘調査を実施しており、調査体制の確保に困難を極めたが、黒田永山古墳群の調査が一段落した時点で、そのスタッフを当古墳の調査に動員することができたのである。

調査は、各所に被掘塹があり、その原形のほとんどが損われていたが、その結果として、古墳であることが確認でき、その主体部として、箱式の木棺を直葬したものであると推察されるに至つたのである。

このような地表観察では確認できない小古墳は、遺物の出土をまって発見されるのが常であるが、今後、発見例が増加してくるであろう。また、今回のような不時発見を待つではなく、より慎重かつ詳細な分布調査の必要性を痛感するものである。

1. 位置と環境（図1）

イ. 位置と地理的な環境

余呉町は、南北に余呉川が縱断し、今市と下余呉との間で、余呉川に注ぐ勘定川と文室川で形成される2つの小盆地状の平地と余呉湖の北岸に広がる低湿地との3ヶ所に分断された平地部を持つにすぎない。この他では、余呉町域は大半が山岳地帯であり、わずかに、今市の北方にのびる伊吹山地の断層谷である柳ヶ瀬地溝帯、下余呉の南方で、大岩山の張り出しによって形成される小谷、余呉川の東方で、これと並行して南流する高時川のつくる谷合いで、狭い谷平野が形成されているにすぎない。しかし、余呉川に沿って、北は越前武生に通じ、南は美濃関が原に至る北国脇往還道と結ぶ北国街道が走り、高時川の形成する狹谷も、北はこの北国街道と結び、南はやはり、湖北平野に出て北国脇往還道に通じており、また、中之郷と下丹生との間が小谷によって結ばれており、北国街道の間道的役割を果している。このように、余呉町は、生産基盤としての平地は諸河川によって形成される狭い谷平野に限られてはいるが、越前等日本海地域へ通じる重要な交通路となっているのである。

今回調査した鉛練古墳は、伊香郡余呉町中之郷字鉛練に所在する。余呉川及び北国街道の東側にあって、北国街道と高時川の形成する間道との連絡路の南側でその東端に位置する。すなわち、大岩山に對峰する人箕山の北西端にあって、その丘腹部に立地する。その西側前面には式内鉛練比古神社が鎮座し、南西方には余呉湖及びその低湿地をのぞむことができる。

なお、当古墳は標高およそ172mにあり、余呉湖水面とは約40mの比高を持っている。

ロ. 歴史的環境

縄文時代遺跡については、湖北平野においては、木之本町古橋、石道附近、すなわち、高時川東岸の段丘上、あるいは、湖北町尾上の余呉川河口附近や葛籠尾崎沖の湖底等で早期から晩期に至るものの出土が知られているにすぎず、余呉川中流域の狹谷には存在しないとされていた。しかし、最近、坂口上ノ山1号墳の発掘調査で、墳丘より土器の小片が出土し、また、柳ヶ瀬の断層より、やはり小片ではあるが、數点の土器片の出土することが知られるようになった。いずれも後期のものと思われるものであり、また、立地、出土状況等よりして、集落跡の存在を思わせるものではないが、今後、余呉川中流域でも、より良好な遺跡の発見に期待がもてるようになった。

弥生時代遺跡では、前・中期にさかのぼるものについては、いまだ発見されておらず、後期及至終末期に至って、下丹生遺跡、坂口遺跡、桜内遺跡等の出現を見ている。これらは、余呉川あ

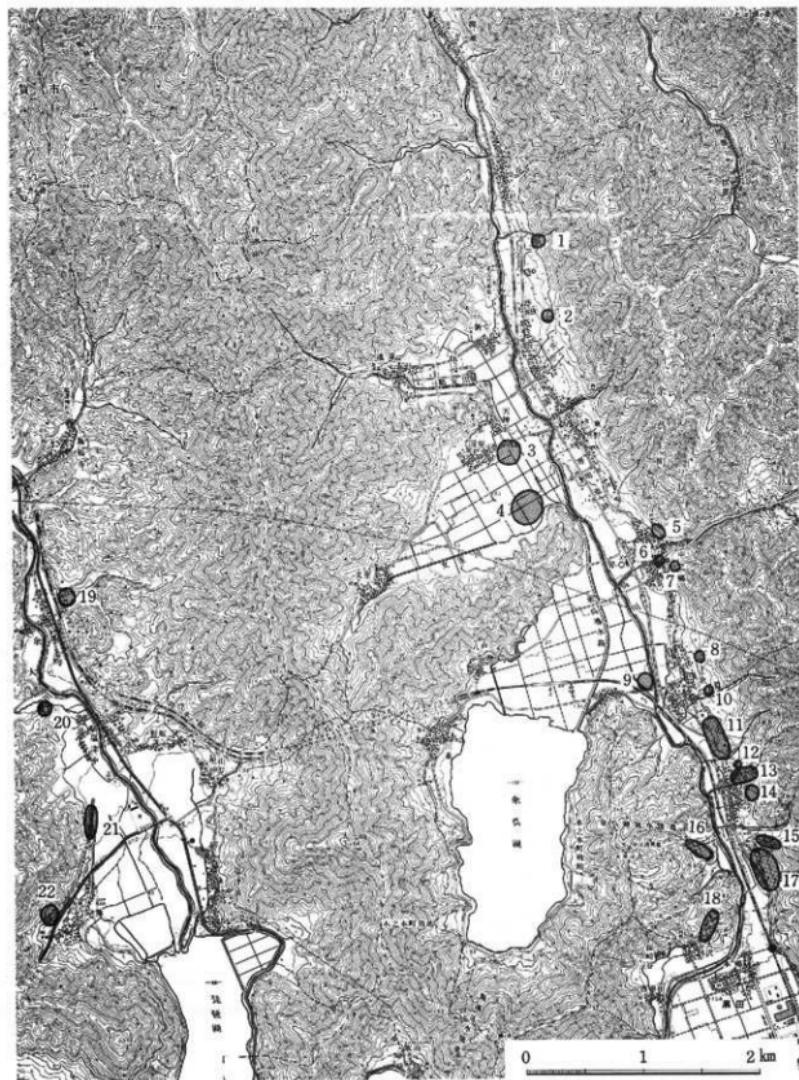


図1 鉛練古墳位置図

番号	遺跡名	所在地	立地	遺跡の概要	年代	備考
1	塚谷古墳	余呂町今市	山麓	円墳1基		
2	風雲古墳	余呂町今市	山麓	円墳1基		
3	松田遺跡	余呂町東野松田	平地	須恵器(墨書き土器有り)、土師器	8世紀	
4	ナラ遺跡	余呂町国安	平地	須恵器		
5	笠上遺跡	余呂町中ノ郷	山麓	近世墓跡、土地裏(勾玉、青玉出土)	4世紀、15世紀	「北陸自動車道開通遺跡発掘調査報告書1」昭49
6	日檜原古墳	余呂町中ノ郷村前	平地	円墳1基		
7	船越古墳	余呂町中ノ郷船越	山麓	円墳1基(直葬墓、須恵器、鉄製品出土)	5世紀末	本報告書
8	崩れ谷古墳	余呂町下余呂崩れ谷	山麓	須恵器		
9	麻方遺跡	余呂町下余呂麻方	平地	須恵器	8世紀	「北陸自動車道開通遺跡発掘調査報告書II」昭51に出で遺物発掘団有り
10	北畠古墳群	余呂町下余呂北畠	山麓	円墳数基(須恵器、勾玉、金環出土)	6世紀後半	「北陸自動車道開通遺跡発掘調査報告書III」昭51に出で遺物発掘団有り
11	坂口北遺跡	余呂町坂口	台地	須恵器、土師器		
12	大門古墳	余呂町坂口大門	山麓	円墳1基(横穴式石室)	6世紀	
13	坂口北遺跡	余呂町坂口	台地	竪穴式住居跡3基以上、近世神社跡(弥生式土器出土)	3世紀	昭51調査
14	上ノ山古墳群	余呂町坂口上ノ山	山麓	円墳7基(横穴式石室、直葬墓、須恵器、勾玉、青玉、玉王出土)	6世紀初頭~7世紀前半	「北陸自動車道開通遺跡発掘調査報告書III」昭51
15	黒田永山古墳群	余呂町坂口永山	丘陵尾根	円墳9基(直葬墓、埴輪、劍、鉢、鏡、斧等出土)	5世紀末	昭52調査
16	西山古墳群	余呂町坂口	丘陵尾根	円墳8基(横穴式石室)	6世紀	
17	桜内遺跡	余呂町坂口桜内	台地	竪穴式住居跡、方形圓溝墓(弥生式土器、須恵器出土)	3世紀、6世紀末	昭52調査
18	黒田古墳群	木之本町黒田森崎山	山頂	円墳6基		
19	東岡遺跡	西浅井町余村東岡	山麓	須恵器	古墳時代	
20	黒崎古墳	西浅井町塙津中	山麓	円墳1基		
21	丸山古墳群	西浅井町塙津中	丘陵尾根	前方後円墳1基、円墳3基	4世紀末~5世紀末	「国鉄湖西線関係遺跡分布調査報告書」昭43
22	岩熊遺跡	西浅井町岩熊	平地	石斧	弥生時代	

表1 周辺主要遺跡一覧表(番号は図1に一致)

るいは高時川にはほとんど接する狭い台地上に立地するものであり、余呂湖北方の平地部においては、この時期の遺跡は知られていない。

古墳時代に入ると、この余呂川中流域の狭谷地帯においても、遺跡の数が急激に増加する。集落跡については、現在のところ下余呂麻方遺跡が古墳時代後期から奈良時代の遺物を出土し、坂口桜内遺跡で古墳時代後期の竪穴式住居跡が検出されているにすぎない。しかし、余呂川に沿って、前期~後期に至る多数の古墳の築造を見ている。前期のものとしては、中之郷笠上遺跡で碧玉製の管玉、勾玉を出土した土塚墓がある。中期のものとしては、その終末期にあって、後期群集墳の先行形態として位置づけ得るものがある。すなわち、上ノ山古墳群、黒田永山古墳群等で、古式の須恵器を出土し、主体部として木棺の直葬の形態をとるものである。これらには、武具、武器、工具等を副葬し、後期群集墳の副葬品とは明らかに異なるものである。今回調査を実施した鉛

練古墳もこの時期に並行するものであり、新たに一資料を追加したのである。中期終末期古墳が中之郷と坂口の2地域に見られるに対し、後期の群集墳は、今市狐谷・塙谷古墳、中之郷日槍塙古墳、下余呉崩れ谷・北畠古墳、坂口大門・上ノ山・西山古墳群と余呉川流域のほぼ全域に分布するようになる。このことは、この地域で、共同体の紐帯がより早くゆるみ、共同体を構成する諸家族の成長を一層はやめた結果といえよう。

しかし、古墳時代を過ぎ、奈良時代以降においては、先述の藏方遺跡や松田遺跡等が平地において知られるにすぎず、この地域が再び歴史の表に顔を出すようになるのは、戦国乱世の時を待たねばならない。

以上のように、余呉川中流域の歴史の変遷は、弥生時代終末期にはじまり、古墳時代後期に最盛期を迎える、奈良時代以降戦国乱世の時まで停滞するといえる。このことは、余呉川中流域が越前武生に通ずる北国街道の基点であり、この幹線の重要度の変遷ともいえよう。すなわち、弥生時代終末期には、坂口遺跡や桜内遺跡において、明らかに北陸系の複合口縁部を持つ斐形土器が出土しており、日本海地域との流通が見られる。また、古墳時代には、5世紀中頃以降、大和朝廷による越前への進攻が考えられており、高月町物部付近が物部氏の湖北地方における根拠地と考えられており、共同体の首長に対する官僚化が進攻のルートたる余呉川中流域で一早く進行したものと考えられることから、共同体の分解、すなわち、後期群集墳の量的増加をもたらしたものと考えられるのである。また、戦国時代には、越前浅井氏の入洛ルートとして、やはりこの北国街道が選ばれているのである。

2. 遺構

イ. 墳丘 (図2~4)

墳丘は、100分の1地形図によてもほとんどその墳形を示さない。主体部に直交する形で設定したD・E両トレントにおいても、大きく4~5回の乱掘跡が認められるだけで、墳丘基盤である地山面の整形状況すら遺存していなかった。従って、今回の調査では、墳丘の規模、形状、築造法等については確認できなかった。

ただ、古墳の立地として、前述のように、西方へ張り出した丘陵の北西斜面にあること、後述するが、主体部である木棺を埋置する墓塚が一部地山を掘り込んでいること等から判断すると、墳丘は、本来、丘陵斜面を利用した低丘なものであったと推察される。また、その盛土も木棺を覆う程度のものと考えられ、さほど多量に用いられたものではなかろう。

ロ. 主体部 (図5)

主体部は、削平及び乱掘跡によりその大半をとどめていないが、須恵器類の出土したことを聞き及んだ個所において、黄褐色の地山を掘り込んだ横断面凹字形の溝状遺構が確認できた。この溝状遺構を追求した結果、東端は擾乱塹により明らかにできなかったが、西端が確認でき、現存長3.3m、幅70~95cm、深さ10~20cmを計ることができた。遺跡発見当時採集された須恵器類は、この溝状遺構の中程で掘穿された擾乱塹の採土より検出されたものであり、発見当時の擾乱塹壁の断面土層観察においても、溝状遺構内堆積土である黒褐色土中に須恵器の包含がみられることを確認している。従って、遺物のすべてはこの溝状遺構内よりの出土と判断できる。さらに、須恵器類に混在して、1点のみではあるが鉄釘が出土しており、木棺の存在が推察され、溝状遺構が木棺を埋置するための墓塚であった可能性が非常に強いといえる。従って、当遺跡は、一部地山を掘り込んで墓塚を形成し、その内に木棺を直葬した主体部を持つ古墳であったと考えられる。

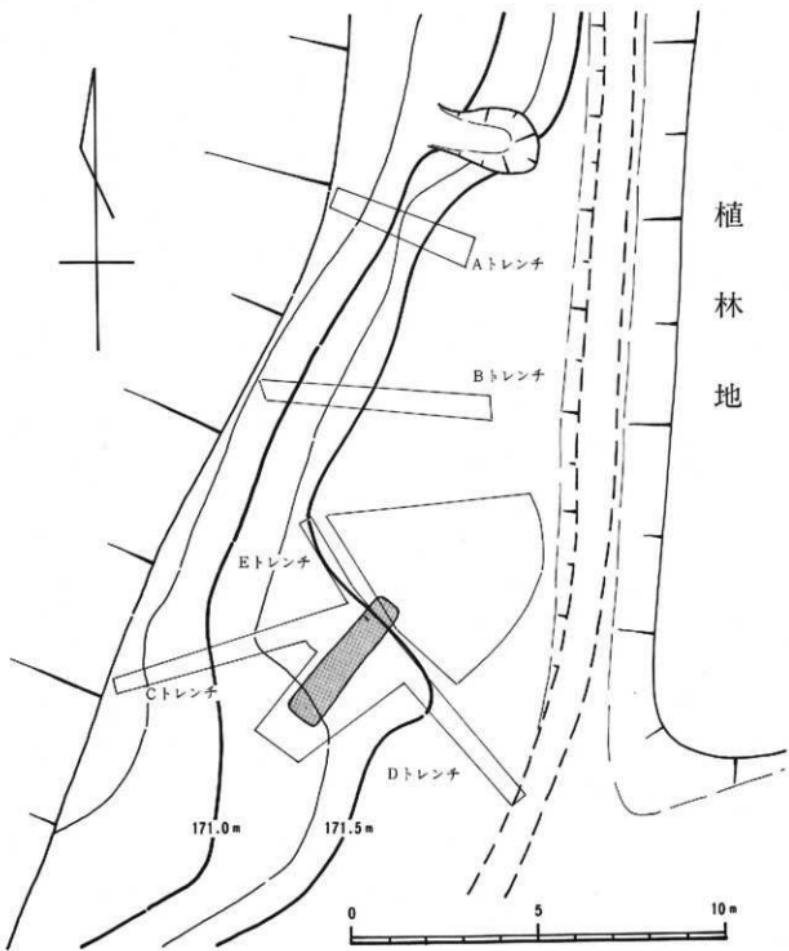


図2 鉛練古墳附近地形図（スクリーントーンは主体部）

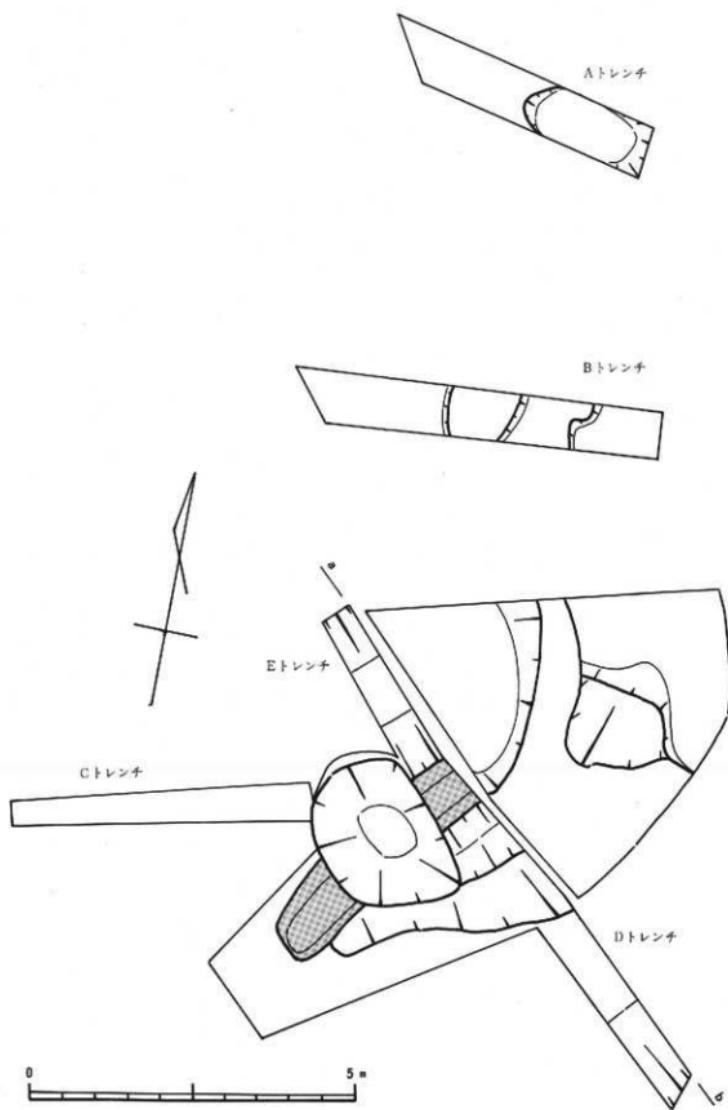


図3 鉛練古墳遺構実測図（スクリーントーンは主体部）

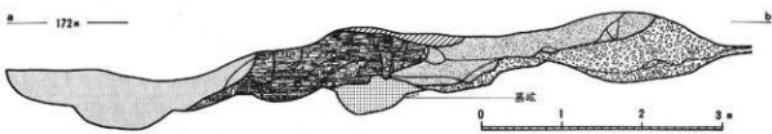


図4 鉛練古墳a-b(D-Eトレンチ)断面土層図(図3参照)

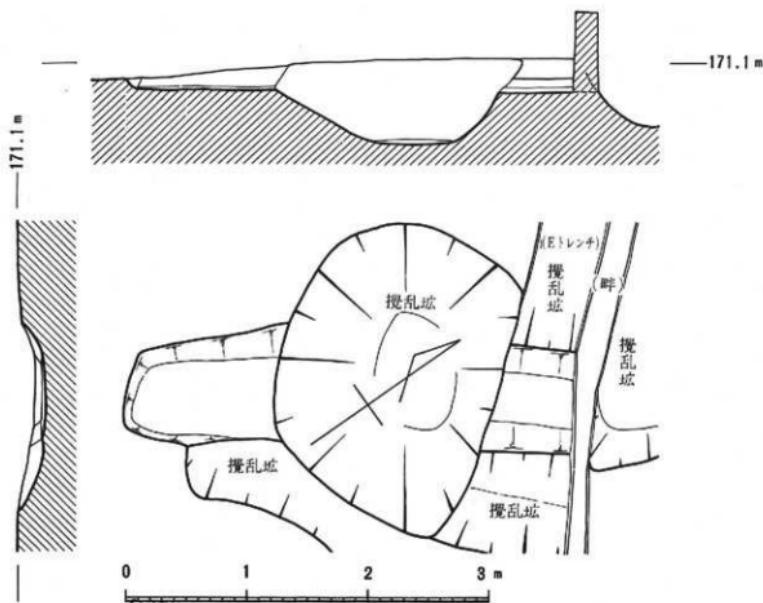


図5 鉛練古墳主体部実測図

3. 遺物 (図6)

イ. 出土状況

出土遺物は須恵器の杯蓋4個体分、身5個体分、有蓋高杯の蓋、身とも各1個体分、大型器台1個体分、器形不明（横瓶か？）1個体分、その他甕、杯等の小片がある。また、鉄製品として、鎌、釘、鉄板状品等が出土している。これらの大半は遺跡発見当時、墓塚部分の掘穿採土中より採集

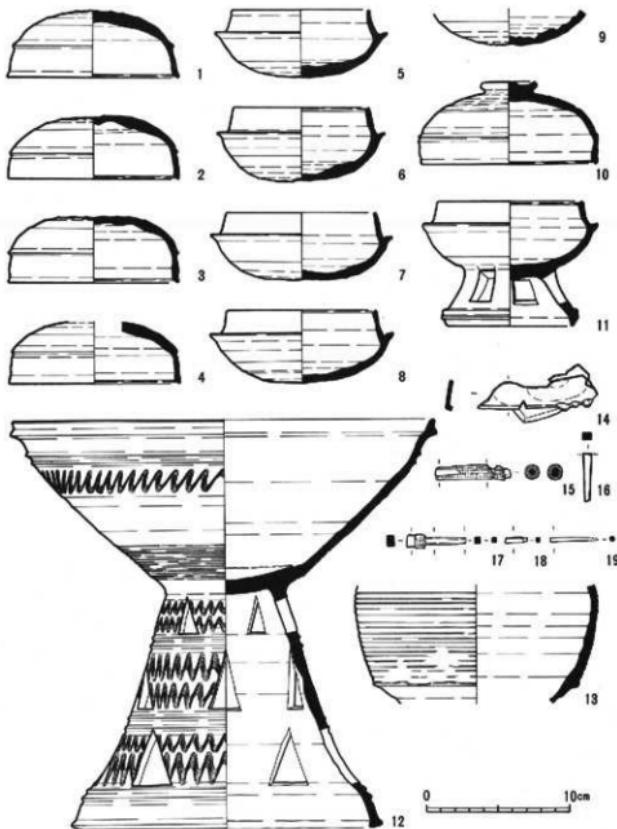


図6 鉛練古墳出土遺物実測図

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯盤	1	天井部は、丸味を持て膨らみ、天井部と口縁部を分る後縁は、丸味を持ってわずかに外方に突出する。口縁部は外方に開き、さらに内凹したのち外方に倒曲する。端部は内傾する端面をつくり、中央は凹む。	ヘラ削りが天井部の約 $\frac{1}{3}$ に及び、時計回り方向を示す。	胎土は粗く、小石・砂粒を多く含む。 色調は黄褐色を呈す。 焼成は良好で堅緻である。
	2	天井部は、比較的丸く、天井部と口縁部を分る後縁はやや尖り気味にわずかに外方に突出する。口縁部は内窓し、端部は内傾する端面をつくり、中央は凹む。	ヘラ削りが天井部の約 $\frac{1}{3}$ に及び、時計回り方向を示す。 内面中央をナナ調整。	胎土は粗く、小石・砂粒を多く含む。 色調は灰色を呈す。 焼成は良好で堅緻である。
	3	天井部は、比較的丸く、天井部と口縁部を分る後縁は、やや尖り気味にわずかに外方に突出する。口縁部ははざかに内窓し、端部は内傾する端面をつくり、中央を凹む。	ヘラ削りが天井部の約 $\frac{1}{3}$ に及び、時計回り方向を示す。	胎土は粗く、小石・砂粒を多く含む。 色調は灰色を呈す。 焼成はやや軟質。
	4	天井部は、丸味を持つ膨らみ、天井部と口縁部を分る後縁は、丸味を持ってわずかに外方に突出する。口縁部は外方に開き、端部は内傾する端面をつくり、中央は凹む。	ヘラ削りが天井部の約 $\frac{1}{3}$ に及び、時計回り方向を示す。	胎土は粗く、小石・砂粒を多く含む。 色調は黒褐色を呈す。 焼成は良好で堅緻である。
杯身	5	たちあがりは、内傾したのち直立し、端部は丸くおさめている。受部は尖り気味に外方に突出する。底部は、丸味を持つ深い。	ヘラ削りは底部の約 $\frac{1}{3}$ に及び、時計回り方向を示す。	胎土は精緻である。 色調は淡灰色を呈す。 焼成はやや軟質。
	6	たちあがりは、内傾気味に立ち、端部は内傾する端面をつくり、中央はわずかに凹む。受部は尖り気味に外方に突出する。底部は、丸味を持つ深い。	ヘラ削りは底部の約 $\frac{1}{3}$ に及び、時計回り方向を示す。	胎土はわずかに小石を含むが精緻である。 色調は淡灰色を呈す。 焼成は良好で堅緻である。
	7	たちあがりは、内傾して立ち、端部は丸くおさめている。受部は尖り水平に突出する。底部は、比較的丸く、やや深い。	ヘラ削りは底部の約 $\frac{1}{3}$ に及び時計回り方向を呈す。	胎土はやや粗く、小石・砂粒を少し含む。 色調は灰色を呈す。 焼成は良好で堅緻である。
	8	たちあがりは、はじめ内傾しやや直立気味に立ち、端部はやや肥厚して内傾する端面をつくり、中央はわずかに凹む。受部は尖り、やや水平に近くに突出する。底部は、丸味を持つ深い。	ヘラ削りは底部の約 $\frac{1}{3}$ に及び時計回り方向を示す。	胎土は粗く、小石を多く含む。 色調は淡灰色を呈す。 焼成は良好であるが、粗い。
	9	底部は、やや丸味を持ち、比較的に深い。	ヘラ削りは時計回り方向を示す。	胎土は小石を含むものの精緻である。 色調は黒褐色を呈す。 焼成はやや軟質。
有蓋 高杯	新10	天井部の中央に、大きいくぼみが付き、天井部は丸味を持つ膨らみ、天井部と口縁部を分る後縁は小さく尖り気味にわずかに外方に突出する。口縁部は直立し端部は肥厚して内傾する端面をつくり、中央は凹む。	ヘラ削りが天井部の約 $\frac{1}{3}$ に及び時計回り方向を示す。	胎土はわずかに細砂を含むが精緻である。 色調は淡灰色を呈す。 焼成は悪く軟質である。
	新11	たちあがりは、内傾して立ち、端部は内傾する端面をつくり、中央は凹む。受部はやや尖り気味に外方に突出する。底部は丸味を持つ深く、脚部は、基部が大きく外窓しているが、端部は上下につまみ上げて段をつくりやや内傾して終る。邊は逆張の三方透しで、口部形状を呈している。	杯部の底にヘラ削りした後脚部を貼付け、接合面をヨコ削りしている。	胎土はわずかに細砂を含むが精緻である。 色調は淡灰色を呈す。 焼成は悪く軟質である。
器台	12	口縁部は外窓し、端部は底から外上方へ弧曲して段をなす。杯部は比較的に浅く、上部に断面三角形をなす凸帯が二条あり、その下に、脚引き波状文がある。脚部は、わずかに外窓しながらカリ、端部で外傾し端部は、左右に大きく肥厚する。脚部の上位・中位・下位の三ヶ所に断面三角形をなす凸帯が二条づつあり、それによって区画された三区にそれぞれ、脚引き波状文が、二条づつめぐり、その上から千鳥状に、三角形の透しが二方づつ入る。	杯部の底は平行引きが施され、その上から、カキ目調整を行い、脚部との接合面はヨコナードで溶接している。	胎土は小石をわずかに含むものの精緻である。 色調は灰色を呈す。 焼成は良好で堅緻である。
不明	13	器形は不明であるが、蓋であろう。脚部はゆるやかに内窓し、弧曲して底部に向う。	脚部にはカキ目調整が施されている。 脚部と底部の境は不整形である。	胎土は小石を含み、やや粗い。 色調は灰色を呈す。 焼成は良好で堅緻である。

表2 鉛練古墳出土土器観察表

されたものである。また、当時現地確認調査を実施した時点での墓塚横断面観察においても、墓塚内堆積土である黒褐色土中に須恵器片が認められた。従って、出土遺物のすべては墓塚内よりの出土と考えられる。さらに、今回の調査において、墓塚底よりの出土遺物ではなく、すべて墓塚内堆積土途中に包含されていたようである。従って、須恵器類は、木棺内ではなく、棺蓋あるいは墓塚肩部等木棺外に副葬されたものと考えられる。

四. 須 恵 器

須恵器は杯身・蓋、有蓋高杯身・蓋、大型器台、壺又は横瓶、甕がある。各々の説明については観察表を作成しておいた。

ハ. 鉄 製 品

鉄製品としては釘、鏃の他小片で形状の不明なものが1点ある。14は厚さ3mm程の板状品で、半径約8cmのカーブを持つ。端部が遺存していて、凸面方向に折り曲げている。用途、性格は明らかでないが、あるいは、短甲等の武具の破片である可能性もある。

15は一端は径4mmの円形、他端が 4×5 mmの長方形断面を示す棒状品である。両端とも欠損している。全体に樹皮を残す径1cm程の自然木にさし込まれている。

17は両端部が欠失しているが、 8×4 mmの横断面長方形部に、 4×4 mmの方形及至径3mmの円形の断面を持つ茎状のものが取り付く。断面長方形部分には、15と同様に樹皮を残す径8mmの自然木がみられる。

18、19は、17の茎状部に続くものと思われ、最大径3mmの円形横断面をもつものである。従って、17～19の茎状部は7.0cm以上の長さを持ち、鉄鏃の基部になる。

16は、一端が 4×3 cm、他端が 6×5 cmと漸次太くなる長方形横断面を持つもの。両端は欠失しているが、鉄釘と思われる。



鉄製品（数字は図6の遺物ナンバー）

4. 考察

イ. 鉛練古墳の構造と年代

墳丘の規模や形状、構造等については、今回の調査では明らかにし得なかった。ただ、規模については、周辺地形が、南側が主体部より約7m程で舌状丘陵の急斜面に至り、また、東側も7m程で段落のある植林地となるため、円墳と想定した場合、最大径14mとなる。本来、これに近似した数値を取る小規模な円墳であったものと思われる。

主体部については、遺物を出土した溝状遺構が西南部で立ち上りを示し、溝の横断面が四字形で、遺存部の両端にはほとんどレベル差がなく水平である事等から、この溝状遺構が一部地山を掘り込んだ墓壙である可能性が非常に強い。また、1点のみであるが、鉄釘片が出土しており、溝の横断面形をも考慮して、本来、箱式の木棺の存在したことが考えられる。従って、附近に石材の散乱を認めないことも考え合せ、当古墳の主体部は、0.85m×3.8m以上の墓壙を穿ち、木棺を直葬したものであると考えることができる。

副葬品は須恵器の杯身、蓋、有蓋高杯の身と蓋、大型器台、鉄釘、錐、不明鉄製品等である。この中で、須恵器類は、ほとんど、墓壙内堆積土である黒褐色土中に包含されたものであり、いずれも原位置を保っていない。しかし、当古墳発見当時の乱掘跡壁に見える墓壙断面の観察で、遺物の残欠はいずれも底ではなく、底壁に近い部分で、浮いた状況で包含されていた。このような状況から、特に須恵器類の副葬は、棺の安置後、その上面、あるいは、肩部附近に置かれたものと推察し得る。

次に、当古墳の年代であるが、墓壙内出土の須恵器類で、杯身が、口縁部径9.6~10.6cm、高さ4.8~5.2cmといずれも小型である。形態、成形とも共通していて、底部に丸味があって、外底面の範削りは3分の2程に及んでいる。蓋は口縁部径12cmで、身の大きさに合う。天井部は丸味があり、外面は3分の2程範削りしている。高杯は、杯部が杯身の形態、成形法に共通し、脚部は三方に透しを持ち、低い。これら杯身、蓋、高杯等の特徴は、大阪府陶邑古窯跡群のT K23あるいはT K47に見られ、また、橋崎彰一による東山式、森浩一のI期等に相当しよう。大型器台は陶邑古窯跡群のT K23に近似したものがある。このように、いずれも、陶邑古窯跡や森氏の言うI期に相当し、その中でも、より新しい段階のものであって、実年代としては5世紀末頃に置くことができよう。

以上のように、鉛練古墳は5世紀末頃に築造され、箱式の木棺を直葬した径14m程の小円墳であると考えができる。鉛練古墳が単独に築成されたものか、群を形成していたものかにつ

いっては、周辺が植林等で変形され、また、遺物の出土したことも聞き及んでいないので、今日では明らかにし得ない。

四、湖北地方における古式須恵器（図7）

鉛練古墳出土の須恵器類は、陶邑古窯跡や森氏のいうⅠ期に相当するものであり、「器形の交代や形態の変化がみとめられるだけでなく、須恵器の量産化を暗示する技術上の変化があらわれ^⑩る」前段階のものである。ここでは、これらを古式須恵器とし、後に考察をすすめるために、湖北地方における出土例を紹介しておく。湖北地方で知見に触れたものは次のとおりである。

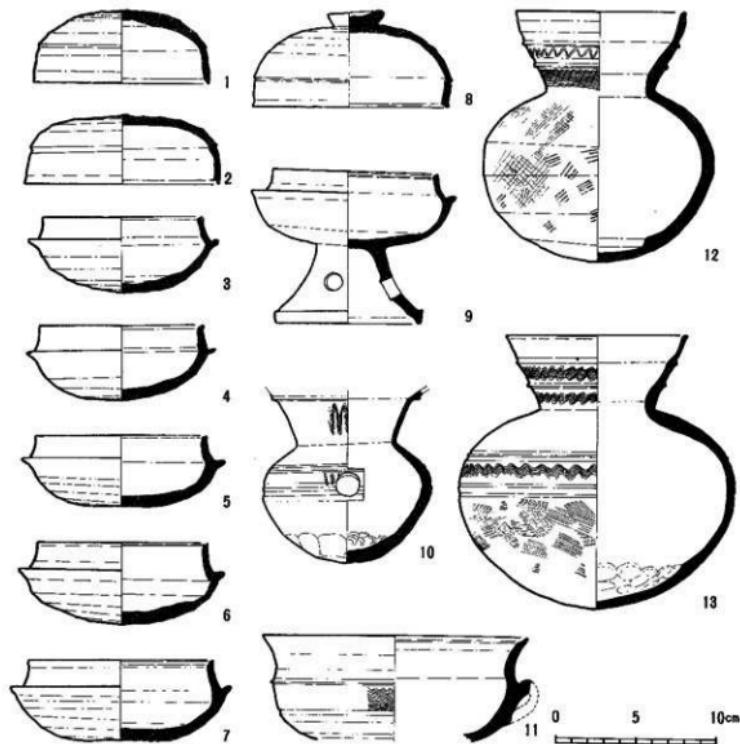


図7 湖北地方出土古式須恵器実測図
(上ノ山7号墳2、6、黒田木山4号墳13、稚波遺跡11、伝茶臼山古墳出土7~10、入江内湖遺跡1、3~5、12)

- ①余呉町中之郷鉛練古墳（図6参照）
- ②余呉町坂口上ノ山7号墳（2、6）[◎]
- ③余呉町坂口黒田永山4号墳第2主体部（13）[◎]
- ④浅井町湯田雲雀山2号墳[◎]
- ⑤びわ町難波・新居難波遺跡（11）[◎]
- ⑥長浜市垣籠伝茶臼山古墳出土（7～10）[◎]
- ⑦近江町能登勢山津照神社古墳
- ⑧米原町磯入江内湖遺跡（1、3、4、5、12）

①鉛練古墳 本報告参照

②上ノ山7号墳 上ノ山古墳群は、舌状台地の先端を取り囲むように、7基の円墳から構成されたものである。このうち、群の南端を占める1～3号墳は、内部主体に横穴式石室を持つことが明らかで、1・3号墳が6世紀末葉、2号墳が7世紀前葉のものと考えられている。7号墳は群中最北端に位置していたが、すでに、開墾により消滅している。開墾時に須恵器杯身1点、蓋2点、直刀らしい鉄製品が出土したと伝え、また、その折に石材の出土を見なかったとのことである。従って、7号墳は木棺の直葬墳であった可能性が強い。7号墳出土の杯身は、口縁部径10.7cm、器高5.2cmで比較的小型である。形態は、やや内傾気味であるが長い立ち上りを持ち、端部は内側に傾斜させて段を持つ。受部はやや上方に傾かくのび、端部は丸く仕上げている。底部は丸味があり、その外面3分の2程を窪削りしている。蓋はこの身とセットをなすもので、口縁部径12.1cm、器高4.3cmを計り、天井部はやや扁平である。天井部と口縁部を分ける棱の突出は小さい。口縁端部は段を持つ。これらは、規模、形態とも鉛練古墳出土品に非常に良く近似している。

③黒田永山4号墳第2主体部 黒田永山古墳群は丘陵尾根上に立地し、10基の円墳からなる。主体部はいずれも明瞭でないが、横穴式石室以外のものが考えられる。10基中4号墳の発掘調査が実施され、墳頂部で、箱式の木棺を直葬した二つの主体部が検出された。これは、南北二列に並置されたもので、須恵器類を出土したのは南側の第2主体部である、第2主体部からは、短印1、鉄刀2、鐵一括が棺内から出土し、須恵器壺1、七輪器高杯1が棺蓋上面に当る部分より出土している。須恵器壺は直口型のもので、口縁部外面に二条の突帯、各突帯の下方に波状文がめぐらされている。体部はやや扁平で、最大径はやや上方にある。体部中程と2cm程上方に2条一对の凹線が二段に施され、その間に波状文がめぐらされている。鉛練古墳からこの種の土器の出土を見ていないが、突帯、凹線、波状文等による施文に、大型器台との類似点がみられる。また、陶邑古窯跡群TK23に、口縁部の破片であるが類品があり、和歌山县陵山古墳出土の穀塚式の直口壺が、体部の波状文を欠くだけで、当古墳出土のものに非常に良く似ている。のことから、黒田永山4号墳第2主体部出土の直口壺は、鉛練古墳出土の須恵器類よりやや古式といえる。[◎]

④雲雀山2号墳 小谷城を築いた小谷山の南方の南北長450m程の独立小丘上に形成されたものが雲雀山古墳群で、8基の円墳より構成されている。このうち、最高所にある1号墳と北側へつらなる2・3号の3墳の発掘調査が実施されている。1号墳は径19~21mの円墳であるが、墳頂部で石組を施した特殊構造が検出され、発祀遺跡ではないかと推定されている。鉄剣形鉄器、土師器高杯が出土し、4世紀後半~5世紀中頃のものとされている。2号墳は径16~17mの円墳で、[◎]「側壁の特殊機能を、簡略化した最小限の構造」を持つ竪穴式石室が検出されている。石室は長さ3.4m、幅1.2m余で、粘土床を持っている。当墳からは、石室内より、変形獸文鏡1、勾玉2、丸玉114、小玉18、三輪玉数個、桶数個、鉄刀2、鉄劍3、鉄鉤1、鐵鎌2括、刀子1、鐵鎌1、短甲1が出土するとともに、須恵器、土師器が石室床面上方30~50cmの所より、散乱した状態であるが、一括出土している。須恵器は有蓋高杯数個、壙1、壙片I類2、II類20余個、土師器は壙1である。3号墳は径11~12mの円墳で、内部主体は「石塊を以って鈎形の区画としての側壁を作っただけの極めて簡単なもの」で、変形獸文鏡1、鉄劍1、鉄鎌1括、須恵器壙1が出土している。年代的には2号墳に近い時期と考えられている。なお、2号墳出土の有蓋高杯は鉛練古墳に近似したものである。

⑤難波遺跡 当遺跡は、昭和49年度は場整備事業大郷工区において、排水路掘穿の際に多量の遺物の出土を見たことによって発見されたものである。発見当時、工事はすでに完了に近く、遺物の包含の仕方、遺構の有無等、遺跡の性格については明確にできなかつたが、採集した遺物には、古墳時代から平安時代にかけての土師器、須恵器、土製馬形品、木製品等がある。また、これら採集品の中に、須恵器の無蓋高杯の杯部の破片があり、当遺跡採集品で唯一の古式須恵器と考えられた。この無蓋高杯は、口縁部が外反し、端部は内傾した面を取り、やや凹む。口縁部と体部との境界は明瞭な凸帯で区別され、さらに体部も一条の凹線で上下に区別され、上部は波状文を施した文様帶となっている。この文様部に環状の把手がつく。杯底部の外は範削りしている。この様な特徴を持つ無蓋高杯は、陶邑古窯跡群T K 208に類品があり、先述の古墳出土品のみならず、湖北地方では、現在のところ、最古式の須恵器である。

⑥伝茶臼山古墳出土 県下最大の前方後円墳である茶臼山古墳附近から出土したと伝える土器類が長浜市立北郷里小学校に保管されている。保管品は、須恵器杯身1、有蓋高杯2、蓋1、碗1、提瓶1、平瓶1、高台付碗1、土師器高杯1で、高台は碗を除く他はすべて古墳時代のものである。古墳時代遺物で、提瓶は、湖北地方後期古墳の編年で黄牛塚古墳期、平瓶は上ノ山1号墳期に当り、いわゆる古式須恵器は、杯、有蓋高杯、碗である。杯身は、口縁部径11.5cm、高さ5cmを計る。口縁部はやや内傾していて、端部に内傾した面を取る。受部は、短かく斜上方にのび、端部は丸い、底部はやや丸味があり、外面の範削りは3分の2に及ぶ。有蓋高杯は、口縁部が内窓気味に立ち上り、その端部は平坦な面を取るものと丸くおさめるものとがある。受部はと

にも短かく、斜上方に突出する。脚部は内凹して開き、端部を上下に肥厚させている。又、脚部には3個の円形の透しが施されている。規模は、杯部の口縁部径10.3cmと10.6cm、器高9.6cm、杯部の深さ4.7cmと4.6cmを計る。蓋は、中央が凹むツマミが付く。口縁部径12.1cm、ツマミまでの高さ6cmを計る。口縁端部は面を取り、天井部との境界は小さい突起で区別されている。又、口縁部は器高に対して短かい。天井部は丸くふくらみ、外面を2分の1程窪削りしている。天井部は口径に比べて高い。底は口縁部が欠けている。体部は最大径が中央より上方にあり、二条一対の凹線文がめぐらされ、その間に刺突文が施されている。円孔は刺突文帶部に穿たれている。口頸部は直線的に、短かく開き、段をつくって口縁部に移行している。口頸部には継長の波状文が施されている。以上の古式須恵器は、杯身が小型の段階であり、蓋は、口縁部と天井部との境界が甘く、口径に対して器高が高い。有蓋高杯はまだ短脚であり、底は口頸部が短かく、体部もやや扁平である。これらの特徴は、杯身、有蓋高杯、蓋等鉛練古墳出土のものに比べ、やや新しく、蓋では陶邑古窯跡群のT K47、有蓋高杯、底では陽徳寺式等に近似している。

なお、これら伝茶臼山古墳の出土品は茶臼山古墳より出土したと伝えるが、茶臼山古墳の墳形、立地よりして、これら須恵器類より年代的にさかのばるものである。茶臼山古墳附近には、桧山古墳群があって、一部横穴式石室の露頭しているものがある。伝茶臼山古墳出土の須恵器類に6世紀末葉まで下るもののが混在しており、その時期的なばらつきがあることからも、むしろ、この桧山古墳群中の出土遺物ではないかと考えられる。

⑦山津照神社古墳 南面する前方後円墳で、横穴式石室を持つ。石室は、全長7.5m、玄室の長さ4.5m、幅2.7m、羨道幅0.9mの規模で、内部に石棺を持つという。出土品は銅鏡3、金銅製装具残欠3、水晶製三輪玉5、鹿角製柄鉄刀子残欠2、刀身残欠若干、鉄塊若干、鞍橋覆輪残欠2、鉄製輪燈片輪、鉄製轡1、鉄地金銅張杏葉2、同雲珠残欠4、鉄製鉢貝1、須恵器大型器台2、壺2、提瓶1、台付長頸壺1、杯身2、埴輪片多量である。これら副葬品のうち、杯身1点のみに、いわゆる古式須恵器がみられるのである。しかし、横穴式石室の平面形は、玄室が 4.5×2.7 mであり、羨道長3mと湖北地方においては、最古式と考えられる四郷崎古墳より後出であり、磯崎2号墳あるいは中山古墳の形態を持っている。また、共伴される須恵器類はすべて6世紀前半頃のものである。従って、古式須恵器である杯身1点は、あるいは、他からの混入品である可能性がある。

⑧入江内湖遺跡 旧入江内湖の湖岸から湖底にかけて、そのほぼ全域から遺物の出土を見る遺跡である。特に、磯西野区附近からは縄文時代以降の多量の土器類、木製品等の遺物の出土を見ている。その中で、地元磯崎文五郎氏の保管になるものに、古式須恵器が数点見受けられる。器種は杯身3、蓋1、直口壺1である。杯身は口縁部径10.0~10.6cm、器高4.5~4.7cmとほぼ同規模である。形態も、いずれも口縁部は内凹気味で内傾し、端部は内側に傾斜した面を取る。受部

は短かく、斜上方に突出し、端部は丸い。底部は丸味があり、外面は2分の1~3分の2程範削りしている。蓋は口縁部径10.9cm、高さ4.5cmで、身のいずれともセットを組むことができる。口縁端部は面を取っていて、尖り気味に終る。天井部との境界の稜は甘く、天井部は丸くふくらむ。直口壺は、口縁部が内側にカーブして開き、端部は丸く終る。口縁外面に2条の凸帯をめぐらせ、頸部までの間に2本の波状文による文様帶をつくっている。体部は最大径を中程にとり、やや扁平であるが球体に近くなっている。施文はなく、柄状品によるカキ目状の調整痕がみられ、底部を範削りしている。これらのうち、杯身、蓋は鉛練古墳や上ノ山7号墳等の出土品に近似した特徴を持つ。また、直口壺では、口縁端部が丸く終り、口縁部の施文がやや粗雑になり、体部の施文が省略されている。さらに、体部が球体に近くなっている等、黒田永山4号墳のものに比べて、やや退化した状況にある。

以上、知見に触れた範囲であるが、湖北地方内で8遺跡からの古式須恵器の出土を見ている。このうち、鉛練・上ノ山7号・黒田永山4号・雲雀山2号・3号・伝茶臼山・山津照神社の7古墳の出土品では、黒田永山4号墳、雲雀山2号墳が他よりやや古式といえよう。また、入江内湖遺跡出土品は鉛練古墳等に近く、難波遺跡出土品は、現在のところ、湖北地方で最古式のものと考えている。

ハ. 湖北地方における後期群集墳の発生とその形成の諸段階

前項で明らかなように、湖地方地において古式須恵器を出土する古墳は鉛練・上ノ山7号・黒田永山4号・雲雀山2号・3号・伝茶臼山古墳出土、山津照神社古墳の7古墳である。このうち、出土地の明瞭でない伝茶臼山古墳出土と出土品のセット関係で疑問の持たれる山津照神社古墳の2ヶ所を除くと、次のような共通点が見出せる。すなわち、

- ①上ノ山7号墳、黒田永山4号墳及び鉛練古墳は木棺直葬、雲雀山2号墳が「簡略化した最小限の構造」を持つ竪穴式石室、同3号墳が「区画としての側壁を作っただけの極めて簡単な」構造を持つものであり、いずれも横穴式石室を内部主体として持たない。
- ②鉛練古墳・上ノ山7号墳・黒田永山4号墳・雲雀山2号墳・同3号墳には共通して武具あるいは武器の副葬品が見られ、表3で明らかのように、横穴式石室墳で多く認められる馬具類の副葬がない。
- ③黒田永山4号墳、雲雀山2号墳及び鉛練古墳では、須恵器、土師器等土器類は、棺内ではなく、棺蓋上方等棺外に副葬されている。等の点である。湖北地方において、最古式と考えられる須恵器は難波遺跡のものである。須恵器が古墳に副葬されるのは、現在のところ、黒田永山4号墳あるいは雲雀山2号墳の段階であって、形式的には1~2形式下る。さらに、須恵器が横穴式石室に副葬されるのは、上ノ山7号墳等より1形式下る湖北町郡上四郷崎古墳からである。出土土器類のうち最古式のI類は、たとえば杯身を見ると、口縁部径12.4cmと大型化しており、高杯にお

No.	古 墓 名	所 在 地	立 地	内部主体	副 墓 品						
					須志器	土师器	武 兵	武 器	馬 兵	装身具	農工具・その他
1	黑田水山4号墳	余井町坂口字水山	丘陵尾根	木 棺 直 葬	壇	高杯	鐵甲	刀・劍 短刀・劍 鏡・銘			鉄斧
2	雲雀山2号墳	浅井町瀬田	丘陵尾根	横穴式石室	有蓋高 杯身、蓋、壇	壇	鐵甲	刀・劍 刀子 鏡・銘		勾玉、 丸玉、 小玉、 三輪玉	变形獸文鏡・指 輪
3	雲雀山3号墳	浅井町湯田	丘陵尾根	横穴式石室	壇			劍・鏡			变形獸文鏡
4	鉢 櫛 古 墳	余井町中之郷字鉢櫛	丘陵	木 棺 直 葬	杯身、 有蓋高 杯身、 蓋、大型 轡台、 亞？、 鏡		鐵甲？	鐵			刀
5	上ノ山7号墳	余井町坂口字上ノ山	丘端	木 棺 直 葬	杯身、 蓋			刀			
6	四 郡 榛 古 墳	岡北町郡上字四郡崎	丘端	横穴式石室	杯身、 有高杯 蓋身、 高杯、 高口壇 蓋、接 鏡、指 鏡、指 鏡	壇		鐵刀		管玉	
7	中 山 古 墳	長浜市小一塙町中山	丘陵尾根	横穴式石室	杯身、 蓋、有 蓋高杯 蓋身、 接鏡、 鏡、指 鏡、高 口壇 蓋、直 口壇 蓋					グラス 小金 鏡、銀 鏡	劫鍔車
8	黄牛塚古墳	近江町湖戸字黄牛塚	丘陵裾部	横穴式石室	杯身、 蓋、有 蓋高杯 蓋身、 高杯、 接鏡、 鏡、直 口壇 蓋、指 鏡	張		刀子		勾玉	刀
9	上ノ山1号墳	余井町坂口字上ノ山	丘端	横穴式石室	杯身、 蓋、無 蓋高杯 蓋身、 蓋、指 鏡	張			比金 幣		
10	諸源山2号墳	長浜市小一塙町諸源山	丘陵裾部	横穴式石室	杯身、 蓋、無 蓋高杯 蓋身、 平底	張				金環	刀・カスガイ
11	諸源山3号墳	長浜市小一塙町諸源山	丘陵裾部	横穴式小石室							

表3 湖北地方主要古墳一覧表

いても長脚化の傾向にある。石室は全長5m、玄室長2.3m、幅3.0m、羨道幅0.5mと横長の玄室の長辺に羨道が取り付くタイプで、現段階では、湖北地方における最古式の横穴式石室であって、上述の共通点①は、横穴式石室導入の前段階における主体部形式を示すものであろう。

共通点②については、内部主体の構造形式の変化とともに、そこに副葬されるもののセット関係の変化も認められる点に注目すべきである。さらに、共通点③においては、副葬品たる須恵器等土器類に対する觀念^上の差異としてとらえることができる。

須恵器生産上の第1の画期として、「器形の変化のみでなく、須恵器の量産化を暗示する製作技術上の変化があらわれる」とされる。須恵器の生産上の画期が単なる製作技術上の問題にとどまるものではなく、そこに、社会的な要請、あるいは、情勢の変化を認め得るものであるなら、上述のような、古式須恵器を出土する諸古墳と横穴式石室を導入した四郷崎古墳以降の諸古墳との墓制上の顕著な差異は、少なくとも、湖北地方における社会的な変化に呼應して生じたものであることを示すものであろう。従って、時代区分上ここに一つの画期があるものと考え、この画期を迎える社会的な変化について、古式須恵器を出土するものを含めた諸古墳群の分析を通じて追求してみたい。

まず、すでに調査が実施され、その内容が比較的明瞭なものに限って通覧しておく。

①上ノ山古墳群 7基の円墳より構成され、このうち1～3号墳とした3基は横穴式石室を持ち、6世紀後半から7世紀初当のものである。これに対し、7号墳は本棺直葬墳と考えられ、6世紀初当にまでさかのぼる。4～6号墳については不明である。

②黒田永山古墳群 10基の円墳から構成され、4号墳は5世紀末の木棺直葬墳である。他のものについても、いずれも木棺直葬墳である可能性が強い。

③鶴雀山古墳群 8基よりなり、1～3号墳は5世紀末～6世紀初頭のもので、いずれも横穴式石室を採用していない。

④四郷崎古墳 最古式の横穴式石室を持ち、単独で群を形成しない。副葬品の須恵器に3形式が認められ、6世紀前半～後半の間に、少なくとも3回にわたる埋葬が認められる。

⑤諸頭山古墳群 3～4基の円墳から構成される古墳群である。2号墳は6世紀末～7世紀初頭の遺物を出した横穴式石室を持ち、3号墳は終末期の豊穴式小石室を持つ小円墳である。1号墳も横穴式石室を持っており、2号墳に近い年代が考えられる。4号墳は古墳であるか否か明瞭でない。

⑥近江町黄牛塚古墳 [◎] 横穴式石室を持つ6世紀後半の円墳である。四郷崎古墳と同様、単独墳である。

⑦米原町磯古墳群 [◎] すべて横穴式石室を持つ6基の円墳から構成されている。現在のところ、2号墳が最古式のもので、四郷崎古墳に続く形式差のある須恵器類が出土している。また、当古

墳群の出土品と伝えるものの中に、7世紀初頭まで下るものがあり、従って、当古墳群は、6世紀中頃～7世紀初頭までの間に形成されたものと考えられる。

以上の7例のうち、いわゆる後期群集墳とされるものは⑤諸頭山古墳群、⑦礪古墳群である。その形成初期の年代に差異を見るが、湖北地方における多くの横穴式石室墳は、このどちらかに相当する。

④四郷崎古墳、⑥黄牛塚古墳は横穴式石室を持ちながら群を形成しないものである。湖北地方には、余興町大門古墳、長浜市布勢古墳等比較的多くの単独墳が認められるが、本来群を形成していたものが、1基を残して消滅してしまったものもある。ただ、黄牛塚・四郷崎両古墳は、周辺地形からして、本来1基単独であったようである。

①上ノ山古墳群は木棺直葬墳と横穴式石室墳が併存するもので、6世紀後半に至って、⑤、⑦例同様、後期群集墳の様相を示すものである。この類例としては、湖東地方ではあるが、安土町竜石山古墳群がある。当古墳群は山丘上に5基より構成されるもので、その全容が明らかにされている。1号墳は墳頂に2棺が直葬され、5世紀中頃に比定されている。2号・4号・5号墳は横口式石室と呼んでおり、3号墳のみ両拵式の横穴式石室を持つといわれる。2号墳がやや古く、3～4号墳がほぼ同時期（海北塚期）とされている。すなわち、6世紀後半に至って、いわゆる群集墳の性格の段階に入る古墳である。

このような古墳群の有り方から、これらを次のようにまとめることができよう。すなわち、

①横穴式石室の採用に至るまでに群の形成を終るもの。

②横穴式石室の採用前に群の形成が始まっており、石室採用以降においても群の形成を継続するもの。

③横穴式石室の採用とともに群を形成するもの。

この3通りが考えられよう。このうち③の有り方は、畿内中枢部においても、遅速の差はあるが、一般的な群集墳である。一方①、②の有り方については、大和盆地北部、河内、摂津地方等畿内中枢部では、群集墳の発生が5世紀代にさかのばる例はないとする。①のタイプを示すものとしては、播磨三木市別所町高木古墳群がある。当古墳群は径20～30mの円墳4基、径10m前後の小円墳27基が群集しており、調査されたものは、すべて、一墳一葬の木棺直葬墓であり、3分の1の古墳から出土した須恵器類は5世紀末から6世紀前半のものが占めているといわれる。②のタイプには橿原市新沢千塚古墳群があり、ここでは、5世紀代の木棺直葬墳が群の内部に含まれている。また、加古川市西条古墳群は、三支群に分かれ、南・北の両支群が横穴式石室を主体とするに対し、中央の支群には木棺直葬が多く、出土須恵器により、5世紀末にさかのばるものがあるといわれる。このように、播磨平野や大和盆地南辺で、畿内の他の地域に先がけて群集墳の発生していることが、すでに、指摘されているのであるが、湖北地方においても、群集墳の

発生を5世紀末までさかのばらせる必要がある。さて、群集墳の発生が、5世紀段階において生じた共同体内部での首長の規制力の弱体化と、共同体を構成する家族の成長により、有力家族が墓を營みはじめることによるとされるなら、上記の3通りの有り方は、およそ次のように説明されるであろう。すなわち、①は、より早く成長した有力家族墓であるが、いわゆる群集墳の最盛期にはその勢力を衰退させていったものの墳墓群、②は①と同様の有力家族墓であるが、群集墳最盛期に至って、なおかつ、社会情勢に対応しつつ成長を続けた家族のものの墳墓群、③は、群集墳最盛期に至って、新たに成長した家族の墳墓群と仮定することができよう。

このような群集墳発生及び形成の諸段階が上記のように説明し得るならば、群集墳を形成した家族の盛衰の起因は何であろうか。特に各段階のものが分布する余呉町内の谷合部を中心にみてみたい。

余呉町内、すなわち、北国街道沿いには、北より、今市に2基、中之郷に3基、下余呉に2基、坂口に3群と1基が知れている。中之郷の3基中1基は笠上遺跡で検出された4世紀代にさかのばるかと考えられた土塙墓であり、その性格が明瞭ではないので除外する。上記①の段階のものとしては、中之郷鉛練古墳、坂口黒田永山古墳群であり、②は坂口上ノ山古墳群である。他はすべて③の段階の群集墳である。これらはいずれも径15m前後の小円墳であり、いわゆる首長系列に属すると考えられる前方後円墳や大型円墳は含まれない。湖北地方、特に伊香郡内において見た場合、首長墓と考えられる前方後円墳は、高月町古保利古墳群、同町涌出山古墳群、同町物部古墳群と高月町の西半部に集中して認められる。これらの性格については、かつて若干触れてみたことがある。^⑨ すなわち、伊香郡が地名考証よりして物部氏と関連すると考えられ、郡内に、「東物部」、「西物部」等の地名が存在すること、また、「東阿閉」、「西阿閉」の地名も存在し、西阿閉の集落内に「安曇」を冠する橋名が見えること等により、当地が和名類聚抄に見る「安曇郷」に当ると考えられる事等からして、伊香郡の地が物部氏との関連において考えられてきた。物部氏については、日本書記において政治的変動期たる応神、仁德両朝にその姿が見られず、5世紀中頃に比定できる履中紀から見られること、その職能が武力を有することと関連して、大和朝廷の関東、越中、越後等東国進出と密接に関連していると考えられる事等からして、5世紀中頃～後半にかけて勢力を得てきた比較的新しい氏族であり、その勢力の伸長は大和朝廷の東国進出と密接に関係して6世紀代に全盛期を迎える、6世紀終末にいたん衰退していった氏族であると考えられている。

このような物部氏の盛衰に対して、伊香郡内における上記古墳群を見ると、古保利古墳群は、最古式の第3号墳は4世紀代にさかのばり、群内中程に位置する75号墳が5世紀前半代のものであって、他の前方後円墳についても、その墳形からして、75号墳に近い年代を与えることができる。従って、古保利古墳群は、4世紀代にその形成が始まり、5世紀前半代に盛期を迎える古墳

群といえる。一方、物部古墳群は、平地に立置すること、墳丘規模が大型化すること、周溝を有すると考えられるものが存在すること等からして、古保利古墳群より後出的で、5～6世紀代の築造になるものと推定される。このように見えてくると、物部氏の成立と勢力の伸長過程に対して、平地に立地する物部古墳群が年代的に対応していく。このように、伊香郡における首長系列の墳墓は地累状の丘陵尾根上に立地する古保利古墳群から平地に位置する物部古墳群へのその位置を変えて継続的に推移していることがうかがえる。この推移が物部氏の当地への進出と深く関連するであろうことは、当地が日本海地方へ通ずるルートの交通上の要所を占めることからも容易に想像できよう。

さて、上記のように、物部氏と関連すると考えられる物部古墳群の形成に対応するかのように、狭長な余呉川沿いの谷合部に多くの群集墳が形成されはじめるのである。このことは、大和朝廷による東国への進出、特に、越中、越後への進出とは無関ではあるまい。すなわち、余呉川沿いはいわゆる北国街道として福井県武生市へ通ずる主要な交通路である。従って、大和朝廷によるこの地域の掌握は不可欠であったものと思われる。伊香郡より日本海地方へ通ずるもう一つのルートとしては敦賀へ通ずる塙津街道が存在するが、この街道沿いでは、前方後円墳1基、円墳3基から構成され、4世紀末から5世紀末にかけて築造された西浅井町塙津中丸山古墳群^⑨が存在するが、この首長系列の墳墓以外では、薬師古墳が知られるにすぎず、北国街道沿いのように、群集墳の形成は顕著ではない。この差異は、大和朝廷の東国進出に伴い、伊香郡への進出、すなわち、北国街道を掌握することにより、街道沿い地域の共同体の分解を促進させた結果によるものではないかと推察されるのである。

以上のように、狭長な谷合部であって、貧弱な生産基盤しか持たない北国街道沿いの地域における群集墳の発生、量的な増加を考えたのであるが、少なくとも、直接、間接の差はある、群集墳の発生が中央政府による支配、被支配体制の確立に伴う共同体の首長層の官僚化と共同体的紐帶のゆるみによって生じる共同体構成家族の成長にもとづくものであるとするなら、中央政府の力がより早くかつ強く及ぶ地域、すなわち、中央政府にとってより重要な地域により早い段階の群集墳が発生するであろうし、その量的な増加も促進されるものといえる。

以上、湖北地方において、群集墳の発生にいくつかの段階のあることを見てきた。そして、すでに5世紀末業にさかのぼって発生していることを指摘した。また、貧弱な生産基盤しか持たない北国街道沿いの地域において、時期的にも、量的にも群集墳が盛行している事実を中央政府の東国進出を契機とするものであろうと推察してきた。鉛練古墳の位置付けについても、以上のような考察の過程で理解し得るものと考える。

おわりに

今回の調査は、不時発見による緊急調査ではあったが、5世紀末に比定できる箱式の木棺を直葬した小古墳であるという結果を得ることができた。湖北地方におけるこの発見は、近年資料が増加しつつあるが、大和北部や攝津、河内の畿内中軸で発見例のない横穴式石室を内蔵しない5世紀末頃の小円墳群といわゆる群集墳発生との問題を考える上で、貴重な一資料を追加したものと言える。

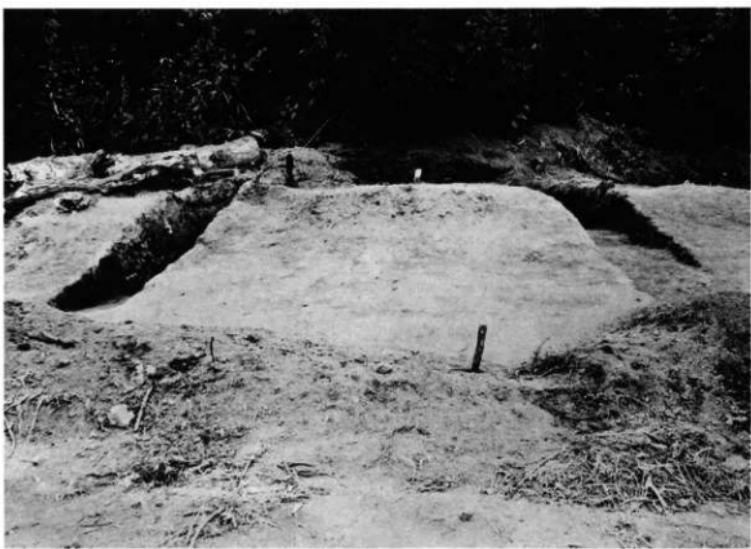
注

- ①小江慶雄「琵琶湖底先史土器序説」（昭和25年）。
- ②田中勝弘「上ノ山古墳群」（『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅲ、昭和51年）。
- ③北陸自動車道建設工事に伴うボックス設置工事の折、その掘削断面土層中より採集されている。
- ④昭和51年度に北陸自動車道関連遺跡として発掘調査が実施され、弥生時代終末期と考えられる堅火式住居跡3棟（うち1棟は2回の縛で替えが認められる）が検出されている。
- ⑤昭和52年度に北陸自動車道関連遺跡として発掘調査が開始されている。約24,000m²に及ぶ広大な遺跡で、昭和52年度には弥生時代後期と古墳時代後期の堅火式住居跡、弥生時代後期の方形周溝墓が検出されている。
- ⑥⑦と同じ。同書に出土遺物実測図を掲載。
- ⑦田中勝弘「笠上遺跡」（『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅰ、昭和49年）。
- ⑧⑨と同じ。
- ⑩昭和52年度に北陸自動車道関連遺跡として発掘調査が開始されている。10基の円墳から構成される古墳群で、昭和52年度には第4号墳の調査が実施された。
- ⑪⑫と同じ。同書に出土遺物実測図を掲載。
- ⑬田辺昭三「陶邑古窯址群」（昭和41年）。
- ⑭猪崎彰一作成「須佐磐編復元図」（『日本の考古学』V、昭和42年）。
- ⑮伊達宗泰・森浩一「土器」（『日本の考古学』V、昭和42年）。
- ⑯⑰と同じ。
- ⑱⑲を参照。
- ⑲直木孝次郎・藤原光輝「滋賀県東浅井郡湯田村雲雀山古墳調査報告」（昭和28年）。
- ⑳田中勝弘「びわ町難波遺跡」（『当场整理関連遺跡発掘調査報告書』Ⅲ-Ⅱ、昭和51年）。
- ㉑『坂田都誌』第1巻。
- ㉒横山浩一「手工業生産の発展——土器部と須志器——」（『世界考古学大系』3、昭和34年）。
- ㉓㉔と同じ。
- ㉕㉖と同じ。
- ㉗田中勝弘「湖北地方の後期古墳の編年——最近の調査例を中心に——」（『近江地方史研究』第3号、昭和51年）及び㉘にその編年の位置付けを試みている。
- ㉙㉚と同じ。
- ㉚鬼柳彰「四脚崎古墳」（『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅱ、昭和50年）。
- ㉛田中勝弘「諸頭山古墳群」（㉚と同じ）。

- ②酒井健二他「黄牛塚古墳」（②と同じ）。
- ③④と同じ。
- ⑤「布勢古墳」（『滋賀県史蹟調査報告』第6号、昭和9年）。
- ⑥水野正好「龜石山古墳群」（『東海道幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』、昭和40年）。
- ⑦都出比吕志「横穴式石室と群集墳の発生」（『古代の日本』V、昭和45年）。
- ⑧田中勝弘「高月町古保利古墳群」（『滋賀県文化財調査年報』第1号、昭和50年）。
- ⑨⑩と同じ。
- ⑪福岡澄男「丸山古墳群」（『国鉄湖西関係道路分布調査報告書』、昭和43年）。



遺跡全景（北より）



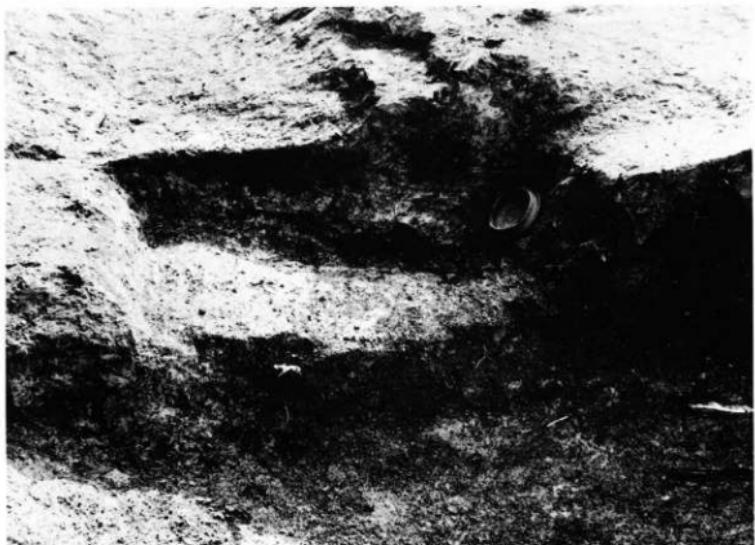
A・Bトレンチ全景（西より）



主体部全景（南西より）



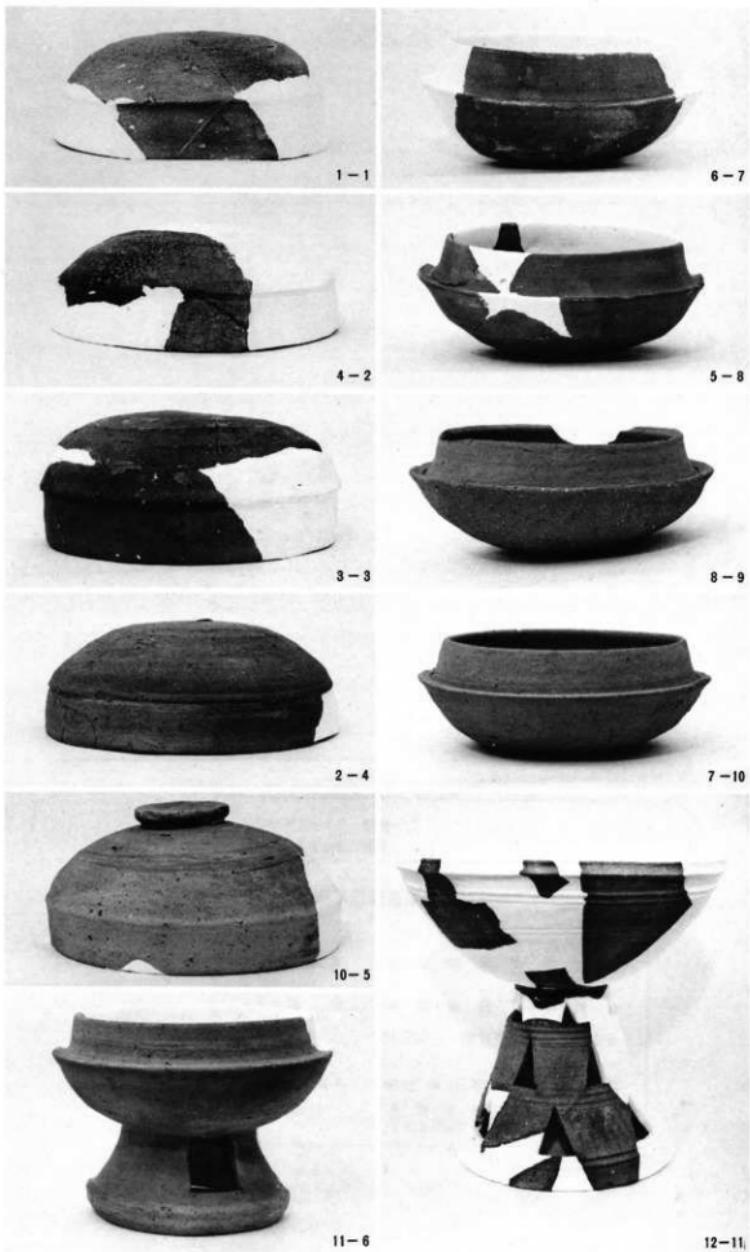
墓塚断面土層



主体部近景（北東より）



遺物出土状態



鉛練古墳出土遺物（前の数字は図6の土器ナンバー）

昭和53年3月5日 印刷
昭和53年3月10日 発行

北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書 IV

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷製本 明文舎印刷商事株式会社

長浜市朝日町22-13
TEL(07496)3-1441㈹